

『迷ったら難しい方を選べ。』

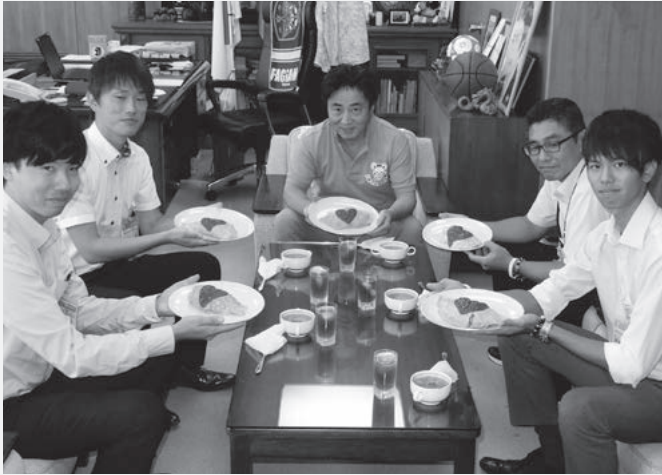
かたおか そういち
そうじや 総社市長(岡山県) 片岡聡一
Souichi Kataoka



誰かのために役に立ちたい、
それが私のテーマ

これまでの人生、決して褒められたものではない。人生、いい時もあれば悪い時もある。それが交互に訪れるのが私の人生パターン。暗黒の高校時代。大学受験の失敗。一浪して入った青山学院大学のキャンパスで感じたものは、新たな光。子どものころから習っていたピアノが開花し、本気でミュージシャンを目指した。

練習するためには楽器がいる。アルバイトでコックを3年半やった。すべての金を音楽につき込む貧乏暮らしだった。その苦勞の副産物は幾多もあった。コック仲間がで



プロのコック顔負けの料理を振る舞う筆者(中央)

き、上等なイタリアンの料理技術も身についた。だから大学を卒業する時、進路に相当悩んだ。テーマは「誰かのために役立ちたい」。その延長線上に3つの選択肢が残った。ミュージシャン。コック。政治家。悩みに悩んだ。ちょうどその当時、ピアノを弾きながら、出場したコンテストに落選しまくっていた。ミュージシャンの道は限りなく細く暗く見えた。そんな中、橋本龍太郎元総理が、何も経験のない私を秘書に迎えてくれた。

大学時代を光り輝く時代と感じていた私にとって、龍太郎先生に仕えた秘書生活は、まさしく、極貧の時代だった。でも、秘書生活の後半、政務の秘書官にも就かせていただき、世界各国に帯同。さまざまな外交も垣間見てきた。

私の人生にとって、自分を培ってくれた21年間。色に例えるなら、ちよつとグレーだ。年間の休日数は、12日以下。つまり、1カ月に1日休みがあるかないか。滅私奉公とはよくいったものだ。

心底お仕えし、心底心酔し、こよなく龍太郎先生をお慕いして、龍太郎先生は私を育ててくださった。師弟関係といえはおこがましいかもしれないが、まさしく私にとっての人生の恩師だ。

私の処世術

一つだけ自分で決めている生き方があ



総社市成人式ではスピーチではなくピアノ演奏で勝負

る。目標に向かって右か左か迷ったら、必ず難しい道へ進んでいく。政務の秘書官をやっていたころ、地元の総社市から、市長選挙に出馬してみないかと甘い声。迷った。苦しんだ。女房はだめだと言う。

迷ったら難しい方を選べ。出馬の決心を思い切って橋本総理に伝えた。あの怖い総理が、それを聞いた途端顔色が変わり、「俺は止めないよ」という言葉を何度も繰り返された。とても悲しい瞬間だった。お暇する前、ごあいさつに伺った時、肩を抱かれ、「がんばるんだぞ」と言われた。その後、数年で総理は亡くなられ、それが私にとって総理からかけられた最後の言葉となった。

市長選の戦いは厳しかった。でも、人生の中でこれほどがんばった12カ月はなかった。選挙活動に没頭した。投票日の夜、選挙事務所は沸きかえっていた。当確だ、当確だと深夜の騒ぎ。しかし、その後状況が一変し、開票作業は難航。私に届いた最終結果は、わずか70票差の落選だった。泣い

た。苦しんだ。あの時の気持ちをよく思い出せない。でもあの日の夜が、私の市政の原点になっている。うらぶれた生活もやった。ふてくされたりもした。人のせいにもした。情けない日々を繰り返した。でも、もう一度立ち上がることを決心した。迷ったら難しい方へ進もう。もう一度チャレンジするんだ。そして一人で7万世帯を歩き抜いた。総社市中を2周り半回った。

2度目の選挙で、同じ現役市長を相手に1万票差をつけ当選した。思えば、秘書時代、落選時代を含め、25年間の間グレーの色の中を、よくぞ歩いてこられたと思う。迷ったら難しい方を選べというのは、やっぱりちよつときつい。

不得意政策で総社市を変える

市長に就任し、不得意政策を得意技に変えていくことに没頭した。全国813市あるが、同じ日本人、不得意政策がそんなに違うものでもなからう。



9度目のフルマラソン完走（たねがしま口マラソン）

テーマは4つ。まずは障がい者政策。3152人、市長に就任当時の市内の障がい者数だ。そのうち18〜65歳までの人は、約1200人。働いている人を調べたら180人。じゃあ残りの1020人はどうするんだ。そこから始めた「障がい者千人雇用」。コツコツコツコツ積み重ね、今では障がい者就労数951人までになった。

次なる課題、二次交通システム。市内ならどこまでいっても300円の乗り合いタクシーを走らせる。地元タクシー会社、路線バス業者は大反対だった。でも、市内に住んでいるお年寄りのためには戦わなければならなかった。業者との折衝は十数回に及び、大激論を繰り返した。最終的にお互い協調し、今では「雪舟くん」という300円タクシーが市内の交通弱者の足となっている。

農業政策。農産物買付会社を設立した。普通の農家から普通の野菜をできるだけ高値に買い上げる。それを販売することで、農家を保護しようとした。同時に、学校給食に素人野菜の搬入を成功させた。米以外のものを作ったら売れるシステム。これが今では総社市の農業の基盤になりつつある。キャベツ、たまねぎ、新たな野菜の産地が出来始めた。

高齢者政策。介護保険料の増大、医療費の増大、何とか歯止めをかけた。健康な人に恩恵はないのか？思い切って健康な人

に対するインセンティブ政策を始めた。健康診断をした上で、一年間に無病息災であった国民健康保険加入者に対し現金1万円の支給をするものだ。結果、初年度70人に対して支給した。市役所に長蛇の列ができた。賛否両論あった。でもどうだろう、3億円の赤字を出していた国民健康保険会計が黒字に転じた。

弱者政策を積み重ねることによって、人口が増えるまちに転じた。子どもが増えるまちに転じた。人口増は企業誘致だけではない。それを立証できたと感じている。それぞれの政策は私にとつての、これまでの光の部分とグレーの部分の織り成すハーモニーで形成されている。

最後に。芸は身を助けるという。暗黒時代に身につけたピアノの奏法と料理のスパイス、落選中走るしかなかったマラソン。それが今の市長生活の中で市民と私を結びつける大きなパイプになっている。人生、無駄なことは一つもない。



一筆一筆に思いを込めて